

## 大学生の部活動・サークル集団に関する研究動向

筑波大学大学院（博）心理学研究科 新井 洋輔

筑波大学心理学系 松井 豊

Trends in research concerning university clubs

Yosuke Arai and Yutaka Matsui (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

In this paper, we examine the current state of research concerning university clubs. First, we review educational and physical education research into university clubs. This research shows that forty to sixty percent of the student body joins clubs. Reasons for joining clubs include not only the club activities but also the social relationships that are formed through participation. This body of theoretical research also discusses the efficiency of clubs, as well as their treatment within the organization of universities. We, then, review the relevant psychological research, which includes both theoretical research into the function of clubs in terms of the student body and empirical research examining seniority norms, leadership, and the relationships between *senpai* (senior members) and *kouhai* (junior members). Finally, we suggest two aspects for research on university clubs; namely the characteristic of university clubs as 'semi-formal groups' and the need to investigate the interaction between club members, which is important in understanding and solving the interpersonal problems that arise within university clubs.

**Key words:** groups, university clubs, sport clubs.

本論文は、大学生のクラブ・サークル・部活動などの集団に関する研究の動向を整理することを、目的とする。

まずサークルへの参加状況に関する調査やサークルを含む課外活動の在り方に関する提言など、心理学以外の研究について紹介する。続いてサークルや部活動集団を対象とした心理学的研究の動向をまとめ、最後に今後の展開について考察する。

なお、「クラブ」「サークル」「部活動」などの集団の呼称については、研究によって、それぞれ異なる対象を指すものと、区別せずに扱っているものがある。本論文ではこれらを特に区別せず、原則として「サークル集団」という語を用いるが、先行研究が呼称を意図的に使い分けている場合には、各研

究に従って記述する。

### サークル集団の実態調査と教育学的・体育学的研究

以下では、サークル集団への参加状況の調査を中心とした、実態調査や教育学的研究などの、心理学的研究以外の研究を紹介する。

### 全国調査におけるサークル集団への参加状況

内閣府政策統括官（総合企画調整担当）（2001）は、青少年の生活に関する全国調査を、1995年・2000年の2度にわたり実施している。同調査の中には部活動への参加状況に関する質問も含まれてお

り、大学生・大学院生の学校関係の集団（文化部・運動部・その他の部活動）への加入率はそれぞれ、1995年が約5割（49.8%）、2000年が約4割（40.8%）であった。

また、地域や職場のサークルなど大学に関連しないサークル団体への加入率については、年齢別のデータが示されており、18～21才が約1割（1995年11.9%、2000年12.7%）、22～24才も1割強（1995年17.4%、2000年11.4%）であった。さらにこれらの大学に関連しない団体に関する結果（2000年）では、男性の方が女性よりも、加入率が高かった。

### 大学別のサークル集団に関する実態調査

教育学や体育学などの学問分野においては、大学ごとの部活動・サークル集団・同好会などに関する加入率や参加状況、活動内容、加入動機などの実態調査などが行われている。

以下に紹介する教育学的・体育学的研究の大半で、サークル集団への加入率が報告されている。調査によって対象とする集団が若干異なる（スポーツ集団のみ対象、文化系サークルのみ対象などを含む）ため、多少のばらつきがあるものの、全体として4割～7割の加入率が報告されている。

女子大学生を対象に、スポーツ・体育に関する意識調査を含めた実態調査を行った杉山・佐藤（1990）では、サークル活動の場所として、学内が2割、学外が8割弱と、圧倒的に学外のサークルで活動している学生が多かった。同じく女子大学を対象に調査した川端（1998）においても、学内が2割弱、学外が8割強と同様の結果が得られている。この結果について川端（1998）は、女子学生が学外に男子学生との出会いを求めているために、学外サークルへの参加が多いと考察しており、同様の指摘は江刺（1993）にも見られる。男女共学について検討した小林（1997）も、インターカレッジのサークルが増えており、さらに学生が社会人と一緒に地域のサークルに参加する傾向を指摘している<sup>1)</sup>。

### 課外活動に対する大学の支援のあり方

教育学の分野においては、クラブ・サークル・部活動を含めた「課外活動」に関する論考を中心とした研究が多く発表されている。

これらの研究では、サークルや部活動が学生にとってのもつ意義を指摘したのち、大学がどのようにサークルや部活動に介入するべきかを論じたものが多い（栗原，1989；栗林，1989；茂里，2000）。これらの論考の中では、教育学的な観点から、大学が課外活動に関心を向けていないことが指摘され、課外活動を教育の一部として扱い、より積極的に課外活動を含めた体制作りをする必要性を指摘している。

栗原（1989）は、大学がサークル活動に期待しているものとして、①人間関係調整能力の開発②技能・技術の開発③理念的思考力の開発④社会規範の取得の4つがあると整理している。一方、学生のサークル参加の動機には「仲間がたくさんできる」「先輩・後輩のつながりができる」などがあり、学生と大学のサークル活動への期待の間にはギャップがあると指摘している。

また、栗林（1989）は、大学生の多くが授業やカリキュラムなどの教育サービスに不満を持っているが、サークル活動などによって得られる人間関係によって大学生が満足感を得、支えられていることを強調している。

茂里（2000）は、忍耐力、意思伝達力、折衝力、協調性、決断力、適応力、行動力、リーダーシップなどを「人間基礎力」と呼び、この「人間基礎力」を育成する場として課外活動が格好の場であるにもかかわらず、課外活動に対する大学側の評価が高くないと指摘している。

教育学の分野には、学生のスポーツ参加を促す方法の一部として、部活動も含めて論じたもの（荒井，1993）や、課外活動における指導者の役割や必要性に関して議論したもの（鈴木，1989）、課外活動中の事故に焦点を当て、大学が負うべき責任や、予防的措置・事後措置について論じたもの（下村，1989）もある。

この中で下村（1989）は、課外活動団体（なかでも特に非公認団体）は、原則として学生の自主的な意志に基づいて結成され、構成員は学生であり、加入も運営も学生の自発的意思決定に基づいていると指摘し、大学側の指導は必要最小限に限られるべきであるが、大学側に安全や配慮の義務があることを強調している。鈴木（1989）も同様の指摘を行い、教官だけでなくサークル内の上級生についても、リーダーシップの重要性を指摘している。

これらの研究はすべて、課外活動への大学側の支援のあり方が論考の主眼であるために、大学の組織構造に対する提案が中心となっている。この提案の過程において、課外活動が学生の成長に果たす役割

1) ただし、小林（1997）では、インターカレッジや地域サークルへの参加に関して、大学側が実態を把握することの難しさも指摘しており、小林（1997）のこの点に関する考察は、厳密な調査データに基づくものではない。

が議論されており、人間関係を中心とした、学生にとっての課外活動の重要性が繰り返し強調されている。同時に、サークルが原則として自主的運営を行っている現状を踏まえ、サークル内部の上級生にリーダーとしての役割を期待する意見も見られる(鈴木, 1989; 下村, 1989; 栗原, 1989)。

### サークル観・サークル経験に関する研究

教育学・体育学の分野では、サークル経験が学生自身や社会人にどのように捉えられているかを検討した、「サークル観」に関する調査研究が行われている(荒井, 1999; 荒井・迫, 1998; 荒井・曾根・山口・迫, 1998; 迫・荒井, 2002; 迫・荒井・曾根・山口, 1998; 山口, 1987)。

山口(1987)は、2大学503人を対象とした調査を行い、大学生の過去の部活動経験(中学・高校における部活動)に対する意識や、サークル加入者とサークル非加入者のサークル観を比較し、サークル加入の動機などを検討している。同調査においては、サークル加入の動機として、「いろいろな友達とつき合えるから」(65%)と「趣味や得意なことを伸ばすため」(57%)の肯定率が、その他の項目「体をきたえるため」「何となく楽しそうだから」「知識・教養を身につけるため」などの肯定率(3割以下)に比べ、高かった。また、約半数の学生が、「学業がおろそかになるほどサークル活動には熱中すべきでない」と答えている一方で、「サークル活動のために(少しでも)学業が犠牲になっている」と答えた学生も2~3割みられた。この結果を山口(1987)は、「サークル活動は学業と両立できないほどではないが、中には学業の負担となるサークルもあるのが実態」と考察している。

サークル集団における経験がその後の人生に与える影響や、社会人のサークル観に着目し、大学を卒業した社会人を対象にした研究もある(荒井, 1999; 荒井・迫, 1998; 荒井・曾根・山口・迫, 1998; 迫・荒井, 2002; 迫・荒井・曾根・山口, 1998)。この一連の研究で荒井は、クラブ・サークル経験に関して、大学を卒業した社会人359人と大学4年生268人を対象として調査を行っている。

荒井(1999)では、社会人のサークル観について検討し、社会人が「クラブ・サークルを経験した者は、一般常識が身につく」という期待を持っていることや、「社会生活を送る上で、クラブ・サークルの経験は、アルバイトの経験と同様に役に立つ」と考えられていることが明らかにされている。さらに、サークルにずっと入っていた学生は、入らなかった学生に比べ、大学生活で得たものとして「専

門性」と「人間関係」をあげる傾向が強いほか、サークル経験の有無によって「大学時代に好きだった場所」が異なることや、付き合った友人の種類が異なることも明らかにされている。

サークル集団経験に対する社会人の期待については、学生の生活について論じた岡澤(1984)においても「企業が期待する学生とは、成績の良い学生よりもサークル活動やグループ活動を十分に経験している学生である」という指摘がなされている。

山口(1987)の結果や荒井の一連の研究結果から、サークルに加入することで、学業との両立や友人の種類などの大学生生活が、非加入者と比べて質的に異なってくることや、サークル経験が人間関係・専門性の成長や社会性の獲得のために役立つと考えられていることなどが明らかになっている。

### 所属動機などの意識調査

教育学・体育学の研究では、サークル集団への所属動機や、サークル集団に所属することで得た利点や不満点などに関する調査も行われている。

教育学部生を対象にサークル所属の実態調査を実施した渡邊・高橋(2002)では、男女別に調査結果が報告されている。サークル所属の理由として「その活動が好き」が最も多くあげられ(男女ともに9割以上)、男女ともにサークル活動で良かったこととして「友達ができた」をほぼ全員があげていた。また、「サークルを辞めたいと思ったことがある」が男女とも約半数あがり、さらに「サークル内の人間関係で苦労している」が約2割あがっていた。

体育大学の学生を対象として、競技開始の動機や競技生活中の心理状況を調査した阿江ら(阿江・掛水・雨ヶ崎, 1997; 阿江・雨ヶ崎・掛水, 1998)においても、やめたいと思った理由として「練習がきつい」に次いで「人間関係」が多くあがっていた。

他に、サークル所属の理由を検討した研究では、田中ら(田中, 1987, 1989; 田中・田中・渡辺・加賀・平井・野崎・久保, 1986; 田中・田中・渡辺・久保・野崎・平井・加賀・浅井, 1987; 田中・田中・渡辺・平井・野崎・久保・浅井・加賀, 1987)が、サークルへの入部動機を検討している。調査の結果、「親しい仲間ができる」「自分の趣味や感性にあっている」「いろんな経験をしたい」の3選択肢が最も多く回答されていた。さらに川端(1998)は、運動系クラブへの所属理由として「友人を作るため」「何か運動をしたくて」「そのスポーツが好きだから」が多いことを明らかにした。

サークル加入者を対象に、サークルの実態と性役割分業の関係を検討した調査(関西大学人権問題研

研究室女性問題研究班, 1997 (以下, 女性問題研究班と略記)) では, サークルの実態のほか, 先輩後輩関係観などを検討している. この調査では, サークルに入った動機として「大学生活を充実させたかったから」の選択肢が, 女性8割, 男性6割でもっとも多く肯定されていた. また, サークルで満足している点は「大学生活が充実している」が約5割で最も多く, 次いで「親友ができた」「精神的な面で成長した」が約4割で多かった. サークルに関する不満点には「人間関係」という回答が約1割見られた. この調査では先輩後輩関係に関する意識も尋ねており, サークル内の先輩後輩関係に対して, 「規律が保たれる」「礼儀が身につく」などと肯定的に捉える意見が8割以上見られた. しかし, 「伝統であるから今のままでよい」については賛成・反対がそれぞれ約半数で, 意見が分かれていた.

### スポーツクラブの機能に関する研究

体育学における研究では, スポーツクラブと地域社会との関係の観点から, 荒井 (1980, 1983) がスポーツクラブの機能に関して検討している.

荒井 (1980) は, スポーツクラブの機能として, 以下の6つの機能をあげている. すなわち, 個人的なスポーツ欲求の充足機能「ニーズ」, スポーツクラブの活動の中で習得される人間形成の機能「陶冶」, スポーツの普及など地域社会への貢献の機能「啓蒙」, クラブが地域社会に対して開放的な程度「チャンス」, クラブのまとまりや地域のまとまりに対する機能「統合」などである<sup>2)</sup>. 荒井 (1980) は, これらの機能のうち, 「ニーズ」が最も個人的な機能であり, 「陶冶」は個人的・社会的機能の双方を持ち, その他の「啓蒙」「チャンス」などの4機能は社会的機能を持つと整理している. 荒井 (1980) では, 774人のスポーツクラブのリーダーを対象に質問紙調査を実施し, 6つの機能の理想と現実について調査している. その結果, どの機能についても, 理想とする機能の強さよりも, 実際のクラブで充足されている機能が弱いと認識されており, その傾向は特に「ニーズ」「陶冶」「統合」の3機能で強いという結果が見られた. 同様の結果は, クラブ加入者343人と非加入者の地域住民1158人について調査を実施した荒井 (1983) でも得られている.

荒井 (1980, 1983) の研究の主な焦点は, 地域社会とスポーツクラブとの接点であるが, 個人的な機能を持つ2機能のうち, スポーツの欲求を満たす

「ニーズ」とともに, 人間的成長の側面である「陶冶」が社会的機能を含む機能として整理されている点は, サークル集団での経験が個人にとって社会へのつながりになるという, サークル集団の意義を指摘していると考えられる. また, サークル集団のこれらの機能に対する期待が, クラブに加入している当事者だけでなく, 非加入者である地域住民に期待されている点も重要であろう.

### 体育学・教育学における研究のまとめ

以上のように, 体育学・教育学的分野においては, サークルの実態や, 加入動機などのサークル集団に関連した意識調査など, サークル集団に関する研究が多数発表されている. これらの研究結果は以下のようにまとめられる. 大学生は所属大学にとどまらず広くサークル活動の場を広げており (杉山・佐藤, 1990; 川端, 1998; 小林, 1997), サークル集団に所属することで, 集団本来の活動だけでなく, 人間関係を求めている (江刺, 1993; 田中, 1987, 1989; 渡邊・高橋, 2002; 女性問題研究班, 1997). 同時に, サークルに所属する大学生はサークル内の人間関係に対して問題を感じている (渡邊・高橋, 2002; 女性問題研究班, 1997). サークル内の人間関係の側面である先輩後輩関係については, 学生は単に伝統として受け入れたり反発したりするだけでなく, 自分たちなりに肯定的な意義を見出しているようである (女性問題研究班, 1997). また, サークル集団に所属することで, 学生が技術面だけでなく人間的に成長することが, サークル参加者だけでなく, 大学やOBなど外部の人々からも期待されている (荒井, 1980, 1983; 栗原, 1989; 茂里, 2000).

ここに紹介したほかにも, 大学ごとのサークルに関する実態調査やスポーツ行動を規定する要因に関する研究は多い (浅井・内山, 1988; 堀江, 1980; 金崎・橋本, 1976; 金崎・多々納・徳永・橋本, 1982; 丹羽・長沢, 1978; 丹羽・村松, 1979; 佐々木, 1993; 多々納・金崎・徳永・橋本, 1982; 徳永・橋本・多々納・金崎, 1982; 吉村, 1984a, 1984b; 湯口, 1989). また, 指導者の体罰に関する阿江の一連の研究 (阿江, 2000など) や, コーチの社会的勢力に関する伊藤の一連の研究 (伊藤, 1994など) など, 指導者と学生との相互作用を検討した研究もあり, これらの研究では心理学的な概念構成も扱われている. しかし, 先に指摘された人間関係の具体的な問題や, 友人関係・先輩後輩関係における具体的な相互作用の実態に踏み込んだ研究は少なく, サークル集団内でどのような問題が生じている

2) もうひとつの機能である「利便」に関しては, この論文では詳述されていない.

かについて、より詳細な検討が必要であろう。

### サークル活動に関する心理学的研究

以下では、サークル集団や部活動に関連した心理学的研究について紹介する。まずサークル集団内の友人関係や先輩後輩関係の心理学的意義について述べ、続いて社会心理学の4領域におけるサークル集団を対象とした研究の動向をまとめる。

#### サークル集団所属の心理学的意義

教育学・体育学の学問分野における研究では、部活動やサークル集団に所属することが、技能・社会性の成長につながることや、人間関係を豊かにすることなどが指摘されていた。心理学的研究においても、同様の指摘がなされている。

教育学的研究における栗原(1989)の調査結果に見られるように、部活動やサークル集団においては、同輩の友人だけでなく、先輩や後輩との関わりも生まれる。心理学的研究では、宮下(1995)が、先輩後輩関係の意義について以下のように考察している。

宮下(1995)は、先輩後輩関係の意義として、共通目標を共有してリーダーの下で協力してこれを育んでいくことや、後輩は礼儀と尊敬の態度を学び、先輩は後輩に対する配慮・指導などの上位者の役割を担うことなどを通して、それぞれ社会性を獲得することをあげている。

松井(1990)は、青年期の友人関係が持つ機能として、心理的支えとなる「安定化」、他者とのコミュニケーション方法を学ぶ「社会的スキルの学習」、行動や考え方の手本とする「発達のモデル」をあげている。これら3つの機能はすべてサークル活動における友人関係や先輩後輩関係にも含まれると考えられる。特に「社会的スキルの学習」や「発達のモデル」の機能は、同輩に対する関係よりも、集団における所属期間や人生経験の豊富な、先輩に対する関係において、より強く果たされていると推定される。

これらの発達心理学・社会心理学からの、友人や先輩後輩との人間関係の機能に関する指摘は、大学生のサークル集団における人間関係の機能にも当てはまると考えられる。教育学・体育学の分野でも繰り返し指摘されているとおり、大学生がサークル集団に所属することは、対人関係能力や社会性の獲得にとって重要であるだけでなく、大学生の日常生活において心理的支えとなる安定化の機能をも果たし

ていると推定される。

### 年功序列規範に関する研究

社会心理学の分野においては、サークル集団の「年功序列規範」に焦点を当てた研究がなされている。

結城・山口(1995, 1996; Yuki & Yamaguchi, 1996)は、大学生を対象に、年功序列規範の中でも「権威主義的年功序列規範」の適用された集団場面について検討している。同規範が適用された集団では、先輩が後輩よりも上位の階層に位置づけられ、先輩は後輩に対して大きな貢献を要求する事ができると、結城らは理論化している。結城らは、大学生を対象とした調査の結果から、集団が将来存続するという予期が強い人ほど、集団内の権威主義的年功序列規範を公正とみなす傾向があり、この過程は将来的に後輩が報われるという予期に媒介されていることを明らかにしている。

田島・波多野(1996)は、「テニスクラブ(体育会、サークル)」に所属する大学生を対象として質問紙調査を実施し、年功序列規範がどのような集団において強調されるかを検討している。彼らは、集団の道具的機能、年功序列規範、集団内好意の3つの項目群間の関連を検討し、道具的機能の高い集団において、所属集団の年功序列規範の強さに対する評価とその集団に対する好意との間に、正の相関があることを見出している。

以上の研究は、年功序列規範というサークル集団に特徴的な変数を扱い、年功序列規範の公正性判断や集団への好意という、集団所属への志向に関連した側面を検討している。

### リーダーシップ研究

社会心理学研究においては、リーダーシップ研究の分野において、リーダーシップを検討する対象として、企業のリーダーと同様に大学生のサークル集団や部活動のリーダーが扱われている(Fiedler, 1967; 蜂屋, 1999; 伊藤, 渡辺, 1995; 松原, 1995; 三隅, 1984; 野上, 1997など)。

これらの研究の多くは、リーダーシップの課題志向的側面と集団維持的機能の2つ(それぞれ三隅(1984)におけるPとM、蜂屋(1999)におけるTとMにあたる)について、学生のサークル集団を対象として検討を行っている。

Fiedler(1967)をはじめ、多くの研究において、大学生のサークル集団や部活動は、企業・組織の予備的集団あるいは延長として扱われており、大学生のサークル集団の特性を積極的に検討した研究は少

ない。山口(1987)において指摘されたように、大学生のサークル集団は、高校生の部活動に比べて上下関係が弱いという特徴がある。また、サークル集団では、先に述べた年功序列規範などによって、学年や所属期間による地位関係が生まれる。そのため、年功序列の弱い集団では企業組織に比べ地位関係が不明確になったり、また学年順の地位階層ができたりするなど、企業組織とは異なる集団構造を持つ可能性がある。したがって、サークル集団を単なる企業組織の延長と捉えるのではなく、その特徴を積極的に検討する必要があると考えられる。

さらに、白樫(1985)によれば、集団に関する社会的影響過程は、個人対個人の影響、個人から集団への影響、集団から個人への影響、集団対集団の影響に分けられるが、リーダーシップ研究は個人(リーダー)から集団への影響を検討している。また、年功序列規範に関する研究は、集団の存続期間や年功序列規範の強さなどの、集団特性が個人(集団成員)に影響している研究枠組みをとっている。しかし、教育学的・体育学的研究と心理学的研究の双方で重要性が指摘されたサークル集団内の人間関係は、サークルに所属する大学生と、先輩後輩や同輩の友人との関係であり、これは個人対個人の相互作用であると考えられる。したがって、個人対集団のみならず、個人対個人を対象とした心理学的研究も必要であると考えられる。

### サークル集団への所属を規定する要因

実態調査において、サークル集団に所属している大学生のうち約半数が、一度はサークルを辞めようと思ったことがあるという結果(渡邊・高橋, 2002)をすでに紹介したが、社会心理学的研究においては、運動部への参加動機の種類・検討(山本, 1990, 1991; 山本・金崎・南, 1992)のほか、サークル集団への加入・残留・脱退に関連すると考えられる、満足感(飛田, 1994)や帰属意識(橋爪・佐藤・高木, 1994a, 1994b)、達成動機(樋口・廣田, 1995a, 1995b)などが検討されている。

山本ら(山本, 1990, 1991; 山本・金崎・南, 1992)は、運動部に参加する学生を対象に、参加動機に関する調査を実施している。因子分析の結果から、参加動機には、部をやめることによって生じる種々の問題を回避するための「回避」、技術や記録の向上に関する「達成」、交友関係の維持や拡大に関する「親和」などが見出されている。

飛田(1994)は、サークルやクラブに所属している大学生222人を対象に質問紙調査を実施し、所属サークルへの自分の貢献度の評価と、集団活動の満

足度との関係を、所属サークルの集団の性質(課題志向性と成員志向性)や、サークルのリーダーのリーダーシップの種類との関連から検討している。その結果、集団への自分の貢献度評価が相対的に高い学生は、相対的に低い学生よりも、集団の課題志向性・成員志向性のそれぞれを高くみなしていた。また、自己の貢献度が相対的に低い学生では、集団の課題志向性が高いほど満足度が高いが、自己の貢献度が高い学生では、集団の成員志向性が高いほど満足度が高かった。

樋口・廣田(1995a, 1995b)は、大学生のスポーツ集団への参加が自発的であるにもかかわらず、しばしばやる気をなくし退部する者がいることを指摘し、やる気に関わる達成動機と、競技成績やリーダーシップとの関係を検討している。樋口・廣田(1995a, 1995b)は、ラクロス部13チームに所属する女子341人を対象とした調査を行い、因子分析結果から達成動機に「自己向上」「活動」「イニシアティブ」の3因子を見出している。樋口・廣田(1995a)ではさらに、チームメイトへの満足度が高いとクラブ本来の目的への動機づけが高いことや、達成動機とチームの競技成績との関連が見られないことなどを明らかにしている。また、樋口・廣田(1995b)では、達成動機の3因子とリーダーシップの型(三隅(1984)のPとM)との関連などが検討されている。

橋爪・高木(1995)は、学生生活の充実感とサークル集団への所属状況との関連を分析し、サークルに現在所属している者は充実感が高く、退部者と現在所属していない者は充実感が低いことを明らかにしている。さらに、19人を対象に半構造化面接を行い、部活を離脱する理由として、「技術レベルの差」「活動の熱意を失った」などの個人側の要因と、「先輩の態度への不信」「体制への不満」などの集団側の要因とを見出している。

橋爪・佐藤・高木(1994a, 1994b)は、17サークルに所属する合計555人の大学生を対象として調査を行い、サークルへの帰属意識と個人的欲求の実現への期待との関係について検討している。橋爪ら(1994a, 1994b)は、帰属意識を「サークル集団を自分と同一視し、強い愛着を抱き、あるいは自己実現の場とみなすことで、われわれ意識を抱くようになること」と定義し、因子分析の結果から、組織のために働きたいという「意欲」や、組織に留まりたいという「残留意欲」などの4種の下位側面を見出している。さらに橋爪ら(1994a)では、個人がサークル集団に加入し所属し続ける理由として、個人的欲求の実現への期待をあげ、活動志向性と成員

志向性の二つの個人的欲求が、集団への帰属意識に及ぼす影響を検討している。その結果、成員間が親密であると感じている人や、集団の雰囲気がいいと感じている人は、サークル成員であることに価値を見出し、帰属意識を強く感じていることなどを明らかにしている。また橋爪ら(1994b)では、加入のパターン(自発加入か勧誘加入か)や個人的欲求の種類(活動志向性と成員志向性)別に帰属意識の下位側面の強さを比較している。その結果、「残留願望という帰属意識」は、活動志向的で自発加入の人が強く抱いていることが明らかになっている。

以上の研究では、学生のサークル集団への加入・残留・脱退の関連要因が検討されている。これらの研究では、集団への満足度や達成動機、帰属意識などの、集団活動や集団所属に対する個々の成員の意識を対象にしているが、どの研究においても、集団活動志向の側面と集団成員との関係志向の側面とが検討されている。樋口・廣田(1995a)に見られるように、集団活動への満足度は他成員との関係に強く関連していることから、サークルへの適応を検討する際は、サークルの活動内容の選択や技術レベルの問題とともに、サークル集団内の人間関係についても考慮することが必要であると考えられる。

### サークル内の対人関係に関する実証研究

サークル集団内の個人対個人の対人関係を扱った研究には、集団内の人間関係に関する面接調査(酒井・安藤, 1998)や、集団凝集性に関する研究(阿江, 1987, 1999など)、先輩後輩間の行動や感情を扱った研究(新井, 2000, 2001a, 2001b, 2002a, 2002b; 濱, 2002)などがある。

酒井・安藤(1998)は、クラブやサークルに関する先行研究を概観し、「学生自身は課外活動とどう関わっているのか、クラブやサークルのほかのメンバーとどのような関係を築いているのか、などについての分析は驚くほど欠落している」と指摘している。さらに、先行研究では現代のサークル活動が上下関係やルールを欠いたものと捉えられているが、これらを「ステレオタイプのイメージに基づいて下された評価」と批判し、サークル内の対人関係に関して実態を把握する必要性を主張している。この点を踏まえ、酒井ら(1998)は、学生の友人関係、サークル内の暗黙のルール、集団活動を維持させる要因の3つを検討することを目的に、大学生14人を対象とした面接調査を行っている。その結果、サークルに所属するのは、活動自体への興味関心によるだけでなく、自己イメージの保持や、就職活動のためや、居場所の確保のためなどの、打算的な理由

もあることなどを見出している。

集団凝集性に関する研究では、集団凝集性とスポーツ集団の競技成績との関連などが多く検討されている。これらの研究の成果は阿江(1987)で詳しく紹介されているので参照されたい。

新井は一連の研究(新井, 2000, 2001a, 2001b, 2002a, 2002b)で、サークル集団における先輩から後輩への行動(対後輩行動)と、後輩から先輩への行動(対先輩行動)の側面を抽出し、下位側面ごとに相手との親密さや集団状況要因などの関連を検討している。これらの研究で見出されている先輩後輩間行動の側面には、好意的・拒否的な側面とともに、先輩後輩の役割に関連した行動も含まれていた。また、集団フォーマル性(集団の役割・規則などが明確な程度)や集団凝集性(集団成員が集団に感じる魅力)などの集団の特性と、行動の対象である先輩や後輩に感じる好意的・罰的社会的勢力とは、行動に影響を与え、所属する集団の特性や相手との関係によって、行動が異なることが明らかにされている。

濱(2002)は、先輩から後輩に対する感情(対後輩感情)に、後輩の言動が及ぼす影響を検討している<sup>3)</sup>。場面想定法による調査の結果から、大学生は基本的に後輩に礼儀を期待しているが、行動がよければ言葉遣いにはこだわらないことや、社交性が低い者にとって、敬語が相手との心理的距離の確保に用いられている可能性などを指摘している。

これらの研究では、集団内の対人関係に生起する問題を検討している。しかし、これらの研究では、先輩後輩関係の現状把握にとどまっている。今後は、サークル集団における友人関係や先輩後輩関係に生起する具体的な相互作用について、より発展的な検討が必要であろう。

### サークル集団研究の今後の展開

以下では、これまで紹介した研究知見を踏まえ、サークル集団研究の特質についてまとめ、今後の展開について考察する。

#### サークル集団の特質

サークル集団の多くは、原則として学生の自主的な意志に基づいて結成され、構成員は学生であり、加入も運営も学生の自発的意思決定に基づいているという特徴を持つ。また、サークル集団には、年功

3) ただし、この調査では調査対象者に関する詳細な情報は記載されていない。

序列規範などにもとづく先輩後輩の上下関係が生起していると考えられ、企業集団などに比べて地位関係が不明確であるという特徴も持つ。酒井・安藤(1998)において指摘されたように、このような先輩後輩の上下関係の実態については、新たな実証的分析を待たねばならないが、田島・波多野(1996)において、各集団の年功序列規範の強さが測定の対象となっていたように、サークル集団は集団ごとに上下関係の強さが異なっていると考えられる。

酒井・安藤(1998)の指摘した暗黙のルールを持つ対人関係と、下村(1989)や樋口・廣田(1995a, 1995b)の指摘した自由意志に基づいた加入や運営というサークル集団の2面的な特徴は、従来リーダーシップ研究などにおいて研究の対象となってきた企業組織の構造とは明らかに異なる。これら2つの集団の違いは、企業集団を「フォーマル集団」とすれば、サークル集団は「インフォーマル集団」に近いと考えられる。従来の社会心理学・組織心理学の分野における「フォーマル集団/インフォーマル集団」の概念は、およそ以下のように要約される。

フォーマル集団とは、集団の共通目的に基づいて作られる集団(Pugh, Hickson & Hinings, 1971 北野訳, 1974)で、あらかじめ明文化された階層的な地位構造に、没個人的に成員を配置する事で形成され(Newcomb, 1950 森・萬成共訳, 1956)、明確な規則が存在し、成員の行動が規制されており、それぞれの地位には職務・責任・役割が規定されている集団(広田, 1963)である。一方インフォーマル集団は、個人目的に基づいて作られる集団で、人間の相互作用の反復によって自然発生的に生起し(Pugh *et al.*, 1971)、個人の特性によって行動が期待され、比較的自由に行動することができる集団(広田, 1963; Newcomb, 1950)と定義される。

このような定義を踏まえると、サークル集団は企業集団などに比べてインフォーマル集団に近い性質を持った集団であると考えられる。田島・波多野(1996)においては、集団ごとの地位構造のばらつきの可能性を指摘したが、地位構造だけでなく集団の性質自体も集団ごとに異なっていると考えられる。つまり、サークル集団は集団によって、フォーマル集団に近い集団と、インフォーマル集団に近い集団があるというように、ばらつきがある集団、いわば「セミフォーマル集団(semi-formal group)」であると考えられる。セミフォーマル集団を定義すれば、「フォーマル集団とインフォーマル集団の双方の性質を併せ持つ集団」といえるが、フォーマル集団としての性質の強さは集団ごとに異なり、きわめてフォーマル集団に近い集団からインフォーマル

集団に近い集団まで、集団ごとに性質はさまざまであると考えられる。

セミフォーマル集団は、フォーマル集団としての性質の強さ(集団フォーマル性)が高いほど、個々の役割や規則が強くなると推定され、集団内の対人関係のあり方も異なると考えられる。たとえば、集団フォーマル性が高いほど、先輩後輩関係が厳しくなるというような変化が予測される。したがって、フォーマル性を中心とした分析を行うことによって、サークル集団内の対人関係が明らかになると期待される。

### サークル集団研究の必要性和今後の展開

これまで紹介してきたように、大学生のサークル集団の重要性は、多様な研究視点から指摘されていた。大学生の多くがサークル集団に所属し、大学生生活の充実感にはサークル集団への所属が、時には学業以上に大きな役割を果たしている。また、大学生は、趣味やスポーツに関連したサークル本来の活動だけでなく、人間関係を求めてサークルに参加している。さらに、サークル集団に所属することは、集団本来の目的である、興味を満ちし、技術を向上させる機能だけでなく、サークル集団で得られる友人関係や先輩後輩関係による人間関係的な機能も持つ。すなわち、心理的支えとしての安定化や、リーダーシップや社会規範の取得などの陶冶の機能である。このようにサークル集団には多くの機能がある一方で、所属成員には集団を離れたと思う機会も少なからずあり、成員の一部は人間関係に問題を感じている様子がうかがえる。

このように、大学生にとってのサークル集団の重要性は多くの研究によって指摘されているが、酒井・安藤(1998)が指摘したように、大学生がサークル集団で築いている人間関係の実態を明らかにした研究は、非常に少ない。学生がサークル集団の友人や先輩後輩とどのように関わることで、安定したり、さまざまな技術や能力を獲得したり、あるいは問題を感じているのか、その相互作用に踏み込んだ研究はほとんどない。リーダーシップ研究のような、サークル集団を効率的に機能させるための集団単位での研究の試みとともに、サークル集団に所属する大学生が友人や先輩後輩との円滑な人間関係を保てるように、個人対個人の対人関係に焦点を当てた研究も行っていく必要があるであろう。

すでに指摘したように、サークル集団は、集団ごとにその構造が異なるという特徴を持っている。したがって、集団構造や集団内の対人関係の双方が、集団によって異なる可能性がある。従来の心理学的

研究では、集団単位の分析と個人対個人の分析との双方において、サークル集団の特質を積極的に検討した研究は少ない。集団単位での分析とともに、個人対個人の相互作用を検討することで、サークルに所属する大学生を取り巻く問題と、集団内の対人関係に生起する具体的な問題を深く掘り下げ、これらの問題の解決方法を提案するための、実証的な研究を行っていくことが必要であろう。

また、本研究では大学生のサークル集団に関する研究を中心に紹介してきたが、大学生のサークル集団の機能や人間関係に関する研究知見は、社会人を中心としたサークル集団にも発展させることが可能である。杉山・佐藤(1990)などにおいて、大学生が学内に留まらず学外のサークルに所属している実態が報告されているが、社会人を中心とした学外のサークル集団も、趣味やスポーツの欲求を満たし人間関係を得るといふ、大学生のサークル集団と同様の機能を果たしていると考えられる。大学生の学生生活に充足にとってサークル活動が重要であるのと同様に、社会人の日常生活の適応にもサークル集団活動が大きな役割を担っていると考えられる。今後は、大学生のサークル集団に関する研究知見をもとにした、社会人のサークル集団の構造や、社会人にとってのサークル集団の意義の検討への展開が期待される。

### 引用文献

- 阿江美恵子 1987 スポーツ集団の凝集性に関する文献的研究 体育学研究, 32, 117-125.
- 阿江美恵子 1999 集団としての大学女子軟式野球チーム—競技開始動機及び集団凝集性について— 東京女子体育大学紀要, 34, 59-69.
- 阿江美恵子 2000 運動部指導者の暴力的行動の影響: 社会的影響過程の視点から 体育学研究, 45, 89-103.
- 阿江美恵子・雨ヶ崎俊子・掛水通子 1998 本学競技者に関する研究(5)—運動部所属卒業生への心理学的調査— 東京女子体育大学紀要, 33, 22-28.
- 阿江美恵子・掛水通子・雨ヶ崎俊子 1997 本学競技者に関する研究(4)—エリート競技者の心理的問題に関する分析— 東京女子体育大学紀要, 32, 16-25.
- 荒井貞光 1980 スポーツクラブの6つの機能に関する研究 日本体育学会第31回大会号, 220.
- 荒井貞光 1983 スポーツクラブの6つの機能に関する研究(2)—メンバーと地域住民間のクラブ像についてのギャップ— 日本体育学会第34回大会号, 132.
- 荒井貞光 1993 大学生のスポーツ—現状と当面する課題— 大学と学生, 335, 5-10.
- 荒井貞光 1999 大学生問題とクラブ文化—クラブ・サークルのアンケート調査から— 青少年問題, 46(9), 10-16.
- 荒井貞光・迫 俊道 1998 大学時代のクラブ・サークル経験に関する一考察—社会人のアンケート調査から— 広島経済大学研究論集, 21(2・3), 7-24.
- 荒井貞光・曾根幹子・山口光明・迫 俊道 1998 大学生のクラブ・サークルの教育的・社会的効果の研究(1)—社会人と学生の意識の比較から— 日本体育学会第49回大会号, 172.
- 新井洋輔 2000 セミフォーマル集団における上下関係(1)—サークル集団における対先輩行動— 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 180-181.
- 新井洋輔 2001a セミフォーマル集団における上下関係(2)—サークル集団における対後輩行動の探索的分析— 日本心理学会第65回大会発表論文集, 793.
- 新井洋輔 2001b サークル集団における対先輩行動と親密さ—セミフォーマル集団における上下関係(3)— 日本社会心理学会第42回大会発表論文集, 388-389.
- 新井洋輔 2002a サークル集団における対先輩行動と規定因の影響—セミフォーマル集団における上下関係(4)— 日本社会心理学会第43回大会発表論文集, 686-687.
- 新井洋輔 2002b サークル集団における対後輩行動の構造—セミフォーマル集団における上下関係(5)— 日本心理学会第66回大会発表論文集, 96.
- 浅井 修・内山憲一 1988 女子大生の運動部活動への参加度と関係する要因の検討 大阪樟蔭女子大学論集, 25, 233-242.
- 江刺正吾 1993 女子学生と課外活動 大学と学生, 335, 11-15.
- Fiedler, F.E. 1967 Personality and Situational Determinants of Leadership Effectiveness. In D. Cartwright & A. Zander (eds.) *Group Dynamics*, (3rd ed., Pp. 362-380) New York: Harper & Row.
- 蜂屋良彦 1999 集団の賢さと愚かさ—小集団リーダーシップ研究— ミネルヴァ書房
- 濱 保久 2002 大学生の対後輩感情の規定因 感情心理学研究, 8, 79-80. (日本感情心理学会第9回大会発表要旨)

- 橋爪裕子・高木 修 1995 クラブ・サークルへの加入から離脱までの意思決定過程の研究 日本社会心理学会第36回大会, 86-87.
- 橋爪裕子・佐藤 裕・高木 修 1994a サークル集団帰属意識の研究(1) -サークルに対して抱く魅力と帰属意識- 日本社会心理学会第35回大会発表論文集, 370-371.
- 橋爪裕子・佐藤 裕・高木 修 1994b サークル集団帰属意識の研究(2) -サークルに対する個人的要求の推移と帰属意識の形成について- 日本グループ・ダイナミクス学会第42回大会発表論文集, 208-209.
- 樋口康彦・廣田君美 1995a スポーツ集団における達成動機(2) -組織要因と達成動機の関係, および達成動機と競技成績の関係- 日本社会心理学会第36回大会発表論文集, 134-135.
- 樋口康彦・廣田君美 1995b スポーツ集団における達成動機(3) -リーダーシップ形態とその効果の関係における達成動機のモデレーター効果の検討- 日本グループ・ダイナミクス学会第43回大会発表論文集, 82-83.
- 飛田 操 1994 大学生のサークル集団における自己の貢献度評価と満足度の関連について 福島大学教育学部論集(教育・心理部門), 55, 55-64.
- 広田君美 1963 集団の心理学 誠信書房
- 堀江宗生 1980 最近の学生生活とクラブ活動 IDE 現代の高等教育, 211, 26-32.
- 伊藤豊彦 1994 コーチの社会的勢力の効果に及ぼす選手の個人特性の影響 体育学研究, 39, 276-286.
- 伊藤豊彦・渡辺瑞穂 1995 運動部におけるリーダーシップ・スタイルに及ぼす個人特性の影響 鳥根大学教育学部紀要(教育科学), 29, 39-48.
- 金崎良三・橋本公雄 1976 学生の課外体育活動に関する研究(第1報) -その規定要因について- 九州大学体育学研究, 5, 27-35.
- 金崎良三・多々納秀雄・徳永幹雄・橋本公雄 1982 学生のスポーツ行動の規定要因に関する研究(3) -スポーツ関連要因について- 健康科学, 4, 77-90.
- 関西大学人権問題研究室女性問題研究班 1997 課外活動とジェンダー-関西大学スポーツ系クラブ・サークルの学生意識調査- 関西大学人権問題研究室紀要, 39, 1-98.
- 川端雅人 1998 お茶の水女子大学生の課外活動に関する研究-運動クラブについて- お茶の水女子大学人文科学紀要, 51, 187-202.
- 小林順治 1997 変わる課外活動-上智大学の場合- IDE 現代の高等教育, 386, 39-47.
- 栗原満義 1989 サークル活動の現状と課題- 大学と学生, 288, 29-32.
- 栗林忠男 1989 大学教育における課外活動の位置 大学と学生, 288, 7-12.
- 松井 豊 1990 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫(編著) 社会化の心理学ハンドブック-人間形成と社会と文化- 川島書店, Pp. 283-296.
- 松原敏浩 1995 リーダーシップ効果に及ぼす状況変数の影響について 風間書房
- 三隅二不二 1984 リーダーシップ行動の科学-改訂版- 有斐閣
- 宮下一博 1995 青年期の同世代関係 落合良行・楠見孝(編) 講座生涯発達心理学4 自己への問い直し-青年期- 金子書房, Pp. 155-184.
- 茂里一紘 2000 「人間基礎力」と課外活動の充実 大学と学生, 427, 11-14.
- 丹羽劭昭・長沢邦子 1978 女子大生のスポーツ参加を規定する要因の検討 体育学研究, 23, 109-120.
- 丹羽劭昭・村松洋子 1979 女子大生のスポーツ参加の動機に関する因子分析の研究 体育学研究, 24, 25-38.
- 内閣府政策統括官(総合企画調整担当) 2001 日本の青少年の生活と意識(第2回調査) -青少年の生活と意識に関する基本調査報告書- 財務省印刷局
- ニューカム T.M. 森 東吾・萬成 博(共訳) 1956 社会心理学 培風館 (Newcomb, T.M. 1950 *Social Psychology*. New York: Dryden Press)
- 野上 真 1997 大学生運動部主将のリーダーシップ効果を規定する諸要因 実験社会心理学研究, 37, 203-215.
- 岡澤 宏 1984 現代学生気質と課外教育の問題について 専修人文論集, 32, 19-40.
- ビュー D.S.・ヒクソン D.J.・ヒニングス C.R. 北野利信(訳) 1974 組織とは何か: 諸学説へのアプローチ 評論社 (Pugh, D.S., Hickson, D.J. & Hinings, C.R. 1971 *Writers on Organizations*. 2nd ed. Harmondsworth: Penguin Education.)
- 酒井 朗・安藤めぐみ 1998 課外活動にみる現代大学生の人間関係 お茶の水女子大学人間発達研究, 21, 1-15.
- 迫 俊道・荒井貞光 2002 大学生のクラブ・サークル活動に関する研究 広島体育学研究, 28, 11-20.
- 迫 俊道・荒井貞光・曾根幹子・山口光明 1998

- 大学生のクラブ・サークルの教育的・社会的効果の研究(2)－タイプの違いの比較から－ 日本体育学会第49回大会号, 173.
- 佐々木輝美 1993 学生が文化系サークル活動から得ている満足について－本学英語サークルの調査に基づいて－ 大学と学生, 335, 21-26.
- 下村哲夫 1989 課外活動中の事故と大学の責任 大学と学生, 288, 19-24.
- 白樫三四郎 1985 リーダーシップの心理学－効果的な仕事の遂行とは－ 有斐閣
- 杉山 進・佐藤良子 1990 お茶の水女子大学生のスポーツ・体育に関する意識 お茶の水女子大学人文科学紀要, 43, 157-172.
- 鈴木 邁 1989 課外活動における指導者の役割 大学と学生, 288, 13-18.
- 田島 司・波多野純 1996 大学生のスポーツ集団に見られる年功序列規範と集団機能との関係 日本社会心理学会第37回大会発表論文集, 158-159.
- 田中英之 1987 大学生の課外活動に関する研究－スポーツサークルについて－ 相模女子大学紀要, 51, 161-169.
- 田中英之 1989 大学生の課外活動に関する研究(2) 相模女子大学紀要, 53, 65-72.
- 田中英之・田中健吾・渡辺敏子・加賀秀夫・平井利雄・野崎康明・久保玄次 1986 大学生のサークル活動に関する実態(予備調査) 日本体育学会第37回大会号, 449.
- 田中英之・田中健吾・渡辺敏子・久保玄次・野崎康明・平井利雄・加賀秀夫・浅井 修 1987 大学生のサークル活動に関する研究－入会動機・生き方・イメージ－ 日本体育学会第38回大会号, 452.
- 田中健吾・田中英之・渡辺敏子・平井利雄・野崎康明・久保玄次・浅井 修・加賀秀夫 1987 大学生のサークル活動に関する研究－スポーツ種目の特性, 運動部経験－ 日本体育学会第38回大会号, 453.
- 多々納秀雄・金崎良三・徳永幹雄・橋本公雄 1982 学生のスポーツ行動の規定要因に関する研究(2)－社会的要因について－ 健康科学, 4, 51-76.
- 徳永幹雄・橋本公雄・多々納秀雄・金崎良三 1982 学生のスポーツ行動の規定要因に関する研究(1)－心理的・身体的要因について－ 健康科学, 4, 35-49.
- 渡邊義行・高橋雄一 2002 岐阜大学教育学部学生のサークル所属に関する調査研究 岐阜大学教育学部研究報告(自然科学), 26(2), 23-31.
- 山口 満 1987 大学生から見たクラブ活動, 部活動, サークル活動 昭和61年度筑波大学学内プロジェクト研究一般研究報告書
- 山本教人 1990 大学運動部への参加動機に関する正選手と補欠選手の比較 体育学研究, 35, 109-119.
- 山本教人 1991 正選手と補欠選手の運動部への参加動機と原因帰属様式 健康科学, 13, 49-58
- 山本教人・金崎良三・南 貞己 1992 大学体育大会参加者の運動部参加の動機 健康科学, 14, 25-33
- 吉村 正 1984a 早稲田大学におけるスポーツ系同好会の実態調査(第1報)－組織の内容について－ 早稲田大学体育研究紀要, 16, 27-34.
- 吉村 正 1984b 早稲田大学におけるスポーツ同好会の実態調査(第2報)－活動の内容について－ 早稲田大学体育研究紀要, 16, 35-42.
- 湯口唯男 1989 サークル活動の現状と課題－施設管理・運営上－ 大学と学生 288, 25-28.
- 結城雅樹・山口 勸 1995 集団内の長期的衡平：理論的精緻化とその証拠 日本グループ・ダイナミックス学会第43回大会発表論文集, 136-137.
- 結城雅樹・山口 勸 1996 年功序列規範の公正性判断の媒介過程：集団内の長期的衡平モデルからの予測の検証 日本社会心理学会第37回大会発表論文集, 296-297.
- Yuki, M. & Yamaguchi S. 1996 Long-term equity within a group: An application of the seniority norm in Japan. In H Grad, A. Blanco, & Georgas, J.(Eds.), *Key issues in cross-cultural psychology*. Lisse, The Netherlands: Swets and Zeitlinger.

(受稿4月16日；受理5月21日)